

幼児の身体像 (Body image) の 発達に関する研究

西 垣 悦 代

目 次

I 章 乳幼児の「自己」概念の形成について

II 章 身体像 (Body image) に関する研究の背景

III 章 実証的研究

引用文献

I 章 乳幼児の「自己」概念の形成について

すべての人は、自分の身体的特徴、能力、性格などについて何らかの形で認識を持っている。そして、この「比較的永続した自分自身についての考え」とでも言うべきものは「自己概念」(Self concept)と呼ばれている。では人はいつごろから、どのような形で「自己」というものを意識し始めるのであろうか。

新生児は、自分と自分でないものとの区別がつかない。出産（あるいは、子の側から言えば誕生）によって、肉体的には母親と分離したにもかかわらず、まだ混然とした一体感の中にある。そして自分の周囲にあるもの、自分に関わるものはすべて自分と結びついているため、自分と外界の境界があることすらわからない。仰向けに寝かされている乳児が、自分の顔の前に掌をかざして、じっと見る行動は“hand regard”と呼ばれるが、まだ自他の境界の区別がはっきりしていない乳児が、自分の掌をまるでめずらしいものをながめるように、探索の対象としている様子を観察することができる。こうした漠然とした、未分化な世界に住んでいる乳児に、やがて「自分」とそうでないものとの区別が芽生え始める。最初の「自己」は、自分の身体が外界から区別された存在であることに気づくことから始まるといわれており、これが「自己」概念の形成の原点となるのである。

村田（1981）によると、「自己」の芽生えは次の3つの現象に認めることができる。第一には、乳児が自己の行為の直接の結果として生じる事象を、感受することができるようになることである。ピアジェの言うところの第二次循環反応^{*}の成立は、自分が事象の因果的作因 (causal agent) であることを知る契機となる。

第二には、乳児は生後3ヶ月頃から、自分の手、顔、足などを探索しはじめることである。この時期の赤ん坊は何でも口に持ってゆき、嘗めたり、かじったりして調べるのだが、時には自分

^{*} 註：（乳児自身の）活動がひきおこした、環境の中の変化に興味を持って、その活動をくり返す段階。
波多野完治(編) 1965『ピアジェの発達心理学』より

の指を思い切りかじったり、髪の毛を力一杯引っ張って泣きだす事もある。やがてかじると痛みの起こるものは、そうでないもののようにやたらと強くかじったりはしなくなるが、指や踵を吸ったり、髪の毛を撫でたりはする。このような自己刺激的運動を通して、外界と自己とを画す自己の領域の確認が次第に成立するのである。

第三には、鏡に映った自分の顔や姿を見て、それを自分自身と認めることができるようになることである。3～4ヶ月の乳児は、鏡の前で体を動かすと鏡映像が動くのを楽しみ、しきりに反復すると言われている。しかしその頃はまだ鏡の中の像を叩いたり、手や顔をそれに近づけるなど、像を別な赤ん坊だとみなしている行動の方が多い。鏡映像に対して、自分の体に向けた反応が顕著に見られるようになるのは、1歳を過ぎてからである。鏡映の自己像に向かって乳児が示す行動には、

1. 鏡の裏側を見る。
2. 鏡を見ながら、鏡の自己像を人差し指でくり返しつつく。
3. 鏡の自己像を、保母や実験者に指差して示す。
4. 目に見える身体部位と、その鏡映像とを見較べる。
5. 自分の身体と鏡映像との運動性を確かめる。
6. 鏡映像を相手に見立てて遊ぶ。
7. 鏡を独占する。

などがあると報告されている

柏木（1982）によると身体と自己との関係は、自己＝身体というレベルと、身体を所有する自己、という2つのレベルに区別される。前者は自己とは身体そのもの、自分の身体即自分、という認識で、これは空腹や痛みなどの主観的感覚運動的経験に対応した最初の身体自己である。これに対して鏡映像での自己認知の成立は、自分の身体の所有性が出て来たという次のレベルを意味している。自分に属するものでありながらその自己を客体として認めるということは、かなり難しいことである。それは既に自己概念を持っている成人でさえ、実際に自分の鏡映像に向かい合った時には、いろいろな洞察が生じることを示した北村（1977）の研究にも示されている通りである。また下等な動物には鏡映像の自己認知が不可能なことから、自己像の客体視が高度な認識であり、自己概念と深い関わりがあることがわかる。

このように身体的自己を基礎に発達してきた乳幼児の「自己」意識は、言語の発達とも相俟って「名前」によっていっそう明確化される。植村（1979）の研究によれば、自分の名前を呼ばれて反応するようになるのは1歳3ヶ月以降で、自分から名前を言うようになるのは2歳近くになってからである。名前の持つ「ラベル」としての働きは、「自己」の領域の広がり、明確化の過程において重要な役割りを果たすものである。

以上のように、乳幼児の「自己」意識は身体を基礎として発達し、言語の獲得によって抽象的な思考が可能になるにつれて、概念的なものになっていくと考えられる。それを測定する方法は研究者によってまちまちであり、その発達の過程についても広く認められた説はないようである

が、幼児の持つ身体像がどのようなものであるかを調べることは、幼児の自己概念を知る上で有効な一手段となりうると考えられる。

II章 身体像 (Body image) に関する研究の背景

「身体像」(Body image)の研究はさまざまな領域との関連を持ちながら、独自の発展を遂げてきた。本章は「身体像」(Body image)研究の歴史的背景を概観するものである。

我々は普段、自己の身体を特別意識せずに生活している。自己の身体が存在に直面せざるを得なくなるのは、多くの場合我々が何らかの形で身体的あるいは精神的に病的な状態に陥った時である。19世紀頃から神経学界において、脳損傷を受けた患者の自己の身体観念の異常に関する症例が数多く報告されたが、それを総称する概念はまだなかった。そこで自分の身体について持つ感覚、表象、心象、観念等を言い表わすために考え出された概念のひとつが「身体図式」(Körperschema, Body schema)である。この概念を初めて用いたのはピック (Pick, A. 1908)である。彼は自己の身体部位を示すことのできなくなった患者を観察し、これを身体の表面に関する見当識の障害であるとし「身体図式」(Körperschema)という言葉を使った。このような経過から、当初はもっぱら神経学や脳病理学の領域で使用されていたが、「身体図式」が精神病理学的に論じられるようになったのは、シルダー (Schilder, P. 1923)による。彼は「身体図式」概念を身体知覚の障害のみならず、心気症、離人症、身体幻覚、分裂病の異常体験等の精神疾患にも適用した。シルダーは、その著書『各人が自己について持つ空間像』の英語版(1935)の出版に際して、Körperschemaの訳語としてBody-image(身体像)を選び、身体図式・身体像の概念をより一般的なものにした。彼はBody-imageを対人関係、環境、時間因子などを含む三次元の結合体であると考え、個体の発達における社会化の過程で形成されるものであると考えた。

心理学の分野では、「身体図式」よりも「身体像」という語の方がよく使われている。「通常は順応によって意識の中心からはずれているが、知らず知らずに持っている身体の全体または部分の像で、空間的位置関係を示すもの」(心理学事典)として運動感覚や平衡感覚との関連を強調した捉え方もあるが、「身体全体もしくは各部分について持っている包括的な概念」(新教育心理学事典)として広く捉え、知覚的、認知的、情緒的な心理的身体経験から精神内部に形成されるものであるとする考え方の方が一般的である。このような定義はきわめて包括的であまいである。しかし、この身体像が「自分の身体が外界の事物とは異った物であることを意識させ、自己概念の源泉」となり、「自我を象徴し、個体の適応にも影響する」ところが、心理学において身体像を論ずる時に無視できない重要な点なのである。

自我と身体像との関連についてフロイト Freud, S. は、「自我とは、まず第一に身体自我であり、身体感覚である。身体表面からの感覚が、外界と自分の身体とを区別することから自我がはじまる。」と考えている。また、サズ Szasz, T.S. は「自我は対象としての人間関係のみではない。対象としての自分、身体との間にも相互の交流を持っている。」と考え、身体をひとつの対象とみて、自我が身体を支配していく過程が、身体像の発達過程であると述べている。

このように、自我と身体像とはきわめて密接な関係にある。ゆえに、人がもし何らかの精神的疾患によって自我の崩壊をきたしたならば、身体像にも何らかの異常が見られるであろうと考えられる。このことから、身体像は臨床的にも利用されることになった。さらに臨床面にとどまらず、自己概念の測定のひとつとして、一般の人の人格検査にも利用されている。自己概念を測定する方法には、Verbal な方法と Non-Verbal な方法とがある。Verbal な方法の場合には、身体的自己だけでなく自己の能力、性格などについて自分が持っている印象、評価も測定の対象に含まれるが、Non-Verbal な方法では、身体像をいろいろな条件で描写させるという投映法の形式をとり、このやり方は精神病患者や子どもなど、言語による測定の難しい対象にも実施することが出来るため、利用範囲が広い。

ところで、投映法のひとつとしての描面法は、幼児児童画の系統的研究の流れと相俟って成立に至っている。1880年頃から精神病患者や幼児の自由画が、その精神内界を示すものとして精神分析学の方面などから注目され始めた。一方、幼児画研究の方面からは、リュケ Luquet, G. H. やエング Eng, H. などが縦断的方法を用いて年齢別による絵画の特徴や、その発達と成熟の過程を捉えた研究を行っている。また、横断的方法を用いた研究としては、ケルシェンシュタイナー Kerschenshteiner, G. が1905年に著した『子どもの図画能力の発達』が有名である。これは、ミュンヘンの児童の絵を30万枚以上も集めて分析し、統計的にその発達を測定したものである。

1926年にはグッドイナフ Goodenough, F. L. が『人物画による知能検査』を著し、初めて描画を子どもの精神発達検査として用いた。グッドイナフの『人物描画法』(D A M: Draw a Man) は、描かれた人物の身体の部位数、身体の比率、配置など、18項目51下位カテゴリーによって得点化し、知能年齢を算出するもので、初めは10歳までを対象にしたが後に成人にも適用された。DAM は知能検査としてはいくつかの問題点があったが、かえって描画には知能以外の要因が多く含まれていることを明らかにする結果となり、描画法による性格検査の発展を促した。

1940年代にはゲゼル Gessel, A. によって描画行動が発達診断に使われたり、ベンダー Bender, L. が模写法によって運動ゲシタルトの測定を行った。そして1948年にバック Buck, J. N. の『家・木・人テスト』(H T P)、1949年にはマコーバー Machover, K. の『人物画技法』(D A P: Draw a Persten) が発表されるに至り、人物画法がパーソナリティ・テストとして体系化、組織化された。その後、家族を描く (ポロ, 1949)、教室の様子を描く (ラビノウィッツとメラバース, 1955)、遊び友達と遊んでいるところを描く (イス夫妻, 1956)、などの人物描画法が次々に開発された。これらの描画法の解釈理論の背景には、精神分析や身体像の理論が多く取り入れられている。描画法は手軽に施行できる便利な検査であり、広く利用されてはいるが、現在の段階では誰にでも一義的な解釈が行なえるようなものにはなっていない。

III章 実証的研究

〔目 的〕

既に I, II 章において論じたように、幼児の自己意識の現われは、鏡に映った自分の姿に興味

を持つことや、一人称の使用などに認められる。人が「自分」と思うものには、自分の身体、顔容、自己の才能、能力、気質、性格、自分の社会的評価、人間的価値、信条や願望など、いろいろある（北村, 1977）。その中で身体と顔容についての自己認知は、身体像 (Body image) と呼ばれ、独自の研究がなされている。

また、Kohlberg, L. (1966) は、性的同一視 (sex identity) の形成には、身体像に基づいて男らしさ、女らしさのステレオタイプを発達させる過程が含まれている、と述べている。筆者(1983)の研究においても、4歳児のほとんどが服装や髪型に関して男女のステレオタイプを形成しており、人物画を描かせると、4歳児で81%、5歳児で96%が、自分と同性の人物を描いたということが明らかにされている。そしてもちろん身体像の発達、性的同一視に限らず自己同一性 (identity) の発達の上にも大きな意味を持つものである。

さて身体像に関する研究の中で、身体内部の知覚に関する研究は少ないようである。外側の身体像の構成要素は、他人との比較が容易であるため共通なものが多いのに対し、身体の内側は視覚的にも触覚的にも直接的な手掛りがないため、身体像の形成が困難であることも一因であろう。しかし直接的な手掛りが与えられていないが故にかえって、針生 (1984) も指摘しているように、個人のさまざまな人格特性や内的状態の介入、またそれらの投映的な反映、表出の余地については、外側の身体像に較べてはるかに大きなものがあるのではないかと考えられる。

そこで本研究では、幼児が身体内部をどのように知覚し表現するかを、幼児の描いた身体像の中から探り、明らかにすることを目的とする。

〔方 法〕

1. 被験児：金沢市内の保育園の4, 5歳児88名（男児46名 女児42名）平均月齢 69, 7ヶ月
2. 実験期日：1983年12月

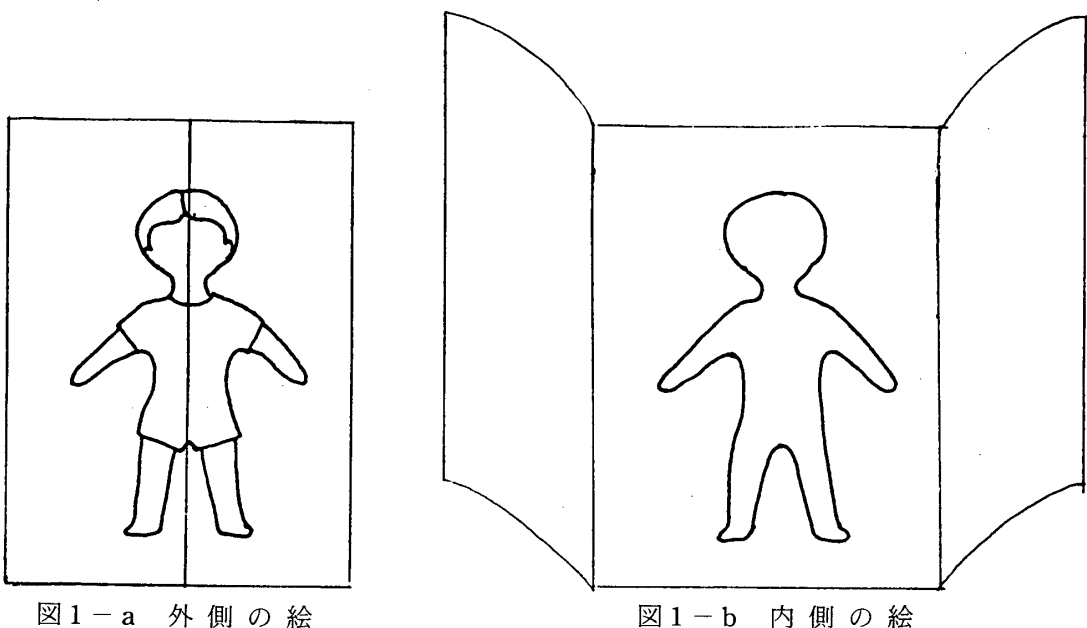


図1 身体像の検査用紙

3. 材料：身体像の検査用紙 Furuya-Steward* によって考案されたもので、簡単な衣服を着た子どもの姿の輪郭の描いてある「外側の絵」と、身体内部を表現させるために、身体の外輪郭のみが描かれている「内側の絵」から構成されている。用紙は外側の絵の中心線から両開きにすると、内側の絵が現われるように作られている。サイズは各々 B 5 版である。

16色入りクレヨン 色は赤、橙、黄、黄緑、緑、水色、青、紫、桃色、肌色、黄土色、茶、こげ茶、黒、灰、白である。

カセットテープレコーダー

4. 手続き：①被験児は実験者と机をはさんで向かいあって座り、以下の教示を与えられる。
(検査用紙を示しながら)「この絵は〇〇ちゃん(被験児の名前)と同じ様な子どもの絵です。これにクレヨンで好きなように色を塗ったり描いたりして下さい。」②「外側の絵」を描き終わったら、実験者によって用紙のページが開かれ、「内側の絵」を示しながら、「これは〇〇ちゃんが今、描いてくれたお友達の体の中です。体の中には何があって、どんな風になっているか、好きなように描いて下さい。」と教示される。何も描かない被験児は、一度だけ「からっぽなの。」と質問される。③描き終わったら被験児は、絵を見ながら質問を受ける。
やりとりは、すべてテープレコーダーに録音された。

〔結果と考察〕

1. 身体内部の理解度について

得られたデータより、幼児の身体内部の表現を理解度に従って分類すると、以下の5種類4段階に分けられた。

I 身体内部について全く理解していない段階

II-a 身体内部に何かがあるということはわかっているが、それを絵に表現することができない段階

II-b 身体内部に何かがあるということはわかっているが、それが何であるかはわからない段階

III 身体内部に何があるかということを知っていて、それを自己流に絵に描き表わすことのできる段階

IV 身体内部に何があるかということを知っていて、体内の器官を具体的かつある程度正確に絵に描き表わすことのできる段階

I の段階には、身体の外側の絵と全く同じに、服を着た人物を描いた者や、裸の姿やうしろ向きの絵を描いた者が含まれる。「体の中」という言葉の意味が十分に理解できないか、見えないものは存在しないもの、という認識の段階であると考えられる。

II の段階 (II-a, II-b) は、身体内部は外側とは違う、ということはわかっているが、それをうまく表現できない者である。II-a には何も描くことができず白紙のままだった者、II-b には、ただ色を塗りたくったり、機械など身体器官以外のものを描いた者が含まれる。(写真 1

* 註：古谷妙子 スチュワード, M. 1981 『「子どものからだ」図版にみられる幼児の病気経験と学習』参照。

幼児の身体像 (Body image) の発達に関する研究

表1 身体内部の理解度の段階

単位=人 () 内%

	4 才 児		5 才 児		合 計	平均 月 齢	S D
	男 児	女 児	男 児	女 児			
I	5 (20.8)	1 (6.7)	0 (0)	5 (18.5)	11 (12.5)	67.7	5.0
II-a	5 (20.8)	3 (20.0)	1 (4.5)	5 (18.5)	14 (15.9)	69.5	5.4
II-b	0 (0)	2 (13.3)	2 (9.1)	1 (3.7)	5 (5.7)	68.6	7.4
III	10 (41.7)	9 (60.0)	6 (27.3)	11 (40.7)	36 (40.9)	68.9	7.4
IV	4 (16.7)	0 (0)	13 (59.1)	5 (18.5)	22 (25.0)	72.5	6.9
合 計	24 (100)	15 (100)	22 (100)	20 (100)	88 (100)	69.7	6.9

表2 平均月齢の t 検定の結果

	I	II-a	II-b	III	IV
I		n.s.	n.s.	n.s.	**
II-a			n.s.	n.s.	*
II-b				n.s.	n.s.
III					**
IV					

** p<.05 * p<.10

表3 男児の年齢と段階の人数比 (人)

	4才児	5才児	計
IV以外	20	9	29
IV	4	13	17
計	24	22	46

($\chi^2=8.87$ p<.005)

表4 女児の年齢と段階の人数比 (人)

	4才児	5才児	計
IV以外	15	22	37
IV	0	5	5
計	15	27	42

($\chi^2=1.63$ n.s.)

参照) II-aとII-bは、直接見ることでできない身体内部についてのイメージを持つことができない点、身体器官の名称を知らない点が共通している。

IVの段階は、解剖学的にある程度正確に身体器官を描き、名称をあげることでできた者である。器官と器官の関連や接続がある程度理解されている。

各段階の人数分布と、平均月齢は表1に示される通りである。

表1より、I段階の被験児の平均月齢は、全体の月齢より2ヶ月低いことがわかる。またIV段階の被験児は、各段階の中できわだって平均月齢が高いことがわかる。

そこで各段階の被験児の月齢の平均の差の検定を行ってみた。結果は表2に示される通りである。表2より、身体内部の理解度による段階のうち、IV段階とそれ以外の段階との間に年齢的な発達の差があることが示唆された。

西 垣 悦 代

表5 描かれた器官と人数

単位=人 () 内%

	4 才 児 (23人中)			5 才 児 (35人中)		
	男 児	女 児	計	男 児	女 児	計
骨	11	4	15 (65.2)	9	9	18 (51.4)
心 臓	3	4	7 (30.4)	8	3	11 (31.4)
脳	0	3	3 (13.0)	8	3	11 (31.4)
食 道	1	1	2 (8.7)	7	6	13 (37.1)
胃	1	0	1 (4.3)	7	4	11 (31.4)
腸	0	0	1 (0)	8	3	11 (31.4)
血 管	4	2	6 (26.1)	3	2	5 (14.2)

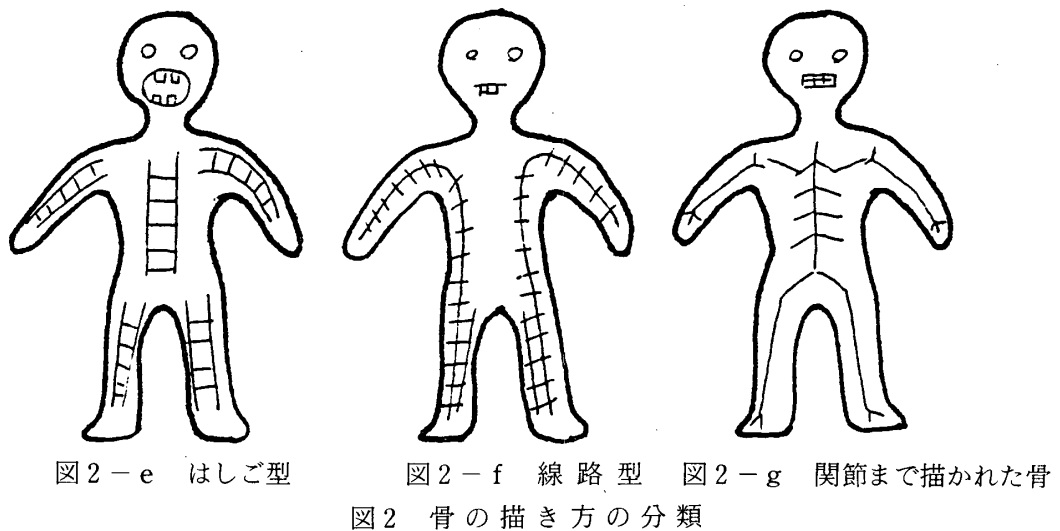
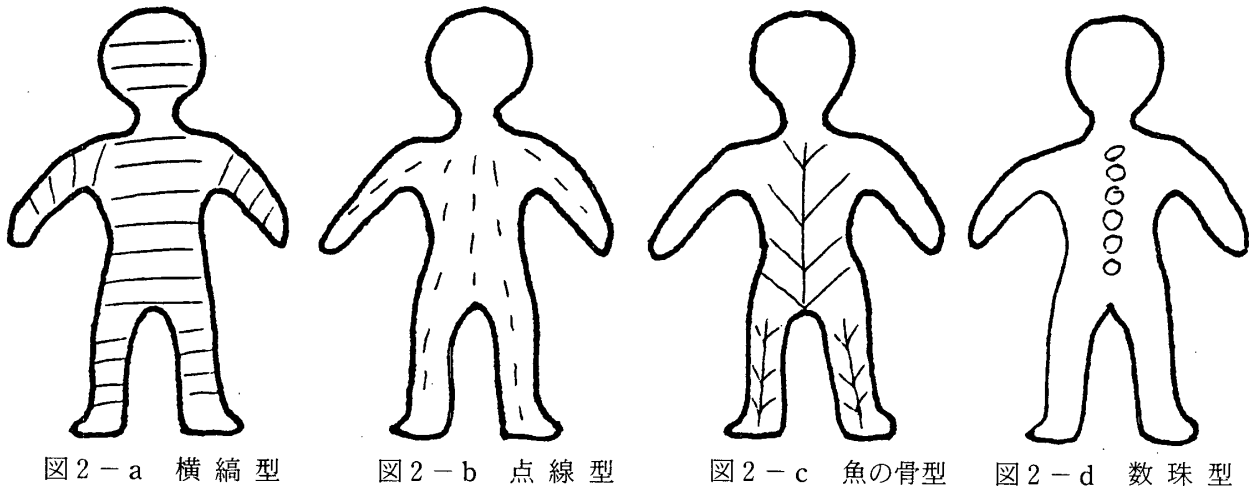
さらに被験児を男女児別に見てみると、男児の場合4歳児はⅢ段階に含まれる者が最も多く41.7%いるが、5歳児では、4歳児には16.7%しかいないⅣ段階の者が59.1%にも達する。そしてⅢ段階は27.3%と少なくなる。しかし女児の場合は、Ⅲ段階の者が4歳児で60.0%、5歳児で40.9%と多く、Ⅳ段階は5歳児でも18.5%だけである。そこで、Ⅳ段階に含まれる者とそうでない者との人数の比を男女児別に表に現わすと、表3、表4のようになった。

人数の比の差を調べるため、 χ^2 検定を行なった結果、女児には有意な差は認められなかったが、男児では0.5%以下の危険率で有意な差が認められた。すなわち、男児の場合は4歳児と5歳児の間で身体内部の理解度にはっきりした開きがあることが明らかになった。これに対して女児の場合は年齢による差がそれほど顕著ではなかった。このことから、身体内部の理解の発達には性差があることが伺われる。

2. 描かれた身体器官の分析

身体内部の器官を描いた被験児(Ⅲ,Ⅳ段階)は58人であった。描かれた器官の主なものとその人数は表5に示される通りである。表5より描かれる頻度の多かったものは、骨、心臓、脳、食道、胃、腸、血管(血液)であった。表に示したもの以外では、肺、筋肉、胆のう、膀胱、肛門、歯が各々1~2名によって描かれていた。表より、4歳児は骨、心臓、血管を描く事が多いが、5歳児では骨に次いで食道、胃、腸、消化器官と心臓、脳が多く、血管はあまり描かれなくなることがわかる。骨、心臓、血管が4歳児に多く描かれたのは、いずれも直接目に触れたり、さわったり、音を聞いたりすることができるため、幼い子どもにとっても比較的親しみのあるためかと考えられる。

Willams, P. D. (1979) が359名の人フィリピン的小学生を対象に描かせた身体像では、骨、腸、心臓、脳、血管、血液、肝臓、筋肉、胃、肺の順に多かったと報告されている。また、Brumback, R. A. (1977) がアメリカの小学生を対象に行なった研究では、小学校1年生の場合、骨、心臓、脳、血管、肺の順で描かれる頻度が高かった。文化による違いはさほど大きなものではないと思われる。



次に各身体器官の描き方の特徴について述べる。骨の描き方には、ただ白く塗りたくっただけのもの、○をつないだもの、点で表わしたもの、横縞、魚の骨型、線路型などが見られた。年齢が高くなるほど、関節などの細かい部分まで詳しく描かれる傾向にあった。使われた色は白が多かったが、灰色、黒、肌色、オレンジなども使用されていた。骨の描き方の特徴を分類すると図2のようになった。

血管の描き方には、真赤に塗りたくったもの、骨と平行して全身に描かれたもの、心臓を中心に循環している様子の描かれているもの、などが見られた。(写真2参照) 心臓の描き方で特徴的だったのは、ハート型に描かれたものがいくつか見受けられたことであった。(写真3参照) 血管の色はすべて赤で描かれていた。

消化器官は、同一の被験児によって食道、胃、腸の3つとも描かれる場合が多かった。それは口から入った食物が、胃腸を通過して消化され、肛門から排出される、という一連の過程が理解されている被験児であることを示しており、そのほとんどが5歳児である。多くの場合、この3つの消化器官はチューブ状に描かれ、互いに連続しているように描かれていた。(写真4参照) また付加物として食べ物のカスを描いた者もあった。色はオレンジ、茶、黒、赤などまちまちであ

西 垣 悦 代

った。消化器官を描いた被験児は、骨や血管や心臓を描かない場合が多かったが、中には両方描いた者も数人あった。今回の被験児の中では最も完成度の高い内容のものであると言える。(写真5参照)

3. 個人分析

身体像には、個人の経験や学習が反映しやすいが、被験児の中に特徴的な表現をする者が何人か見受けられた。

事例1 6歳7ヶ月 女児 胃の横に黄緑色で胆のうを描く。母親が胆のうの手術をして、取り出した緑色の胆石を実際に見た事がある。(写真6参照)

事例2 6歳5ヶ月 女児 脳を詳しく描く。病院で身体検査を受けた際、人体図を見た事があり、強い印象を受けたので覚えていた。

事例3 4歳9ヶ月 女児 身体像に「熱」や「風邪」や「鼻血」を描き表わす。風邪をひいた直後であり、熱けや風邪によるだるさや不快感が、身体に残っていたものと思われる。

事例4 5歳7ヶ月 男児 骨が一本弱々しく描かれているだけで、絵から受ける印象がきわめて生命力に乏しい。普段はなかなか絵を描こうとしない子だという。母が植物人間となって死亡した経験を持つ。(写真7参照)

事例5 遺伝的に全く等しい身体、顔貌を持つ一卵性双生児の身体像がどのようなものであるかは興味深い。5歳8ヶ月の男児の一卵性双生児の場合、別々の場面で描かせたにもかかわらず非常によく似ている。(写真8参照) この2人は外見上ほとんど区別出来ない程よく似ている。

4歳11ヶ月の女児の一卵性双生児の場合、外側の絵のタッチは似ているが、内側の絵はあまり似ていない。(写真9参照) おっとりした姉と勝気な妹で、2人の性格はかなり対称的である。妹は外科手術の経験がある。

〔結論と要約〕

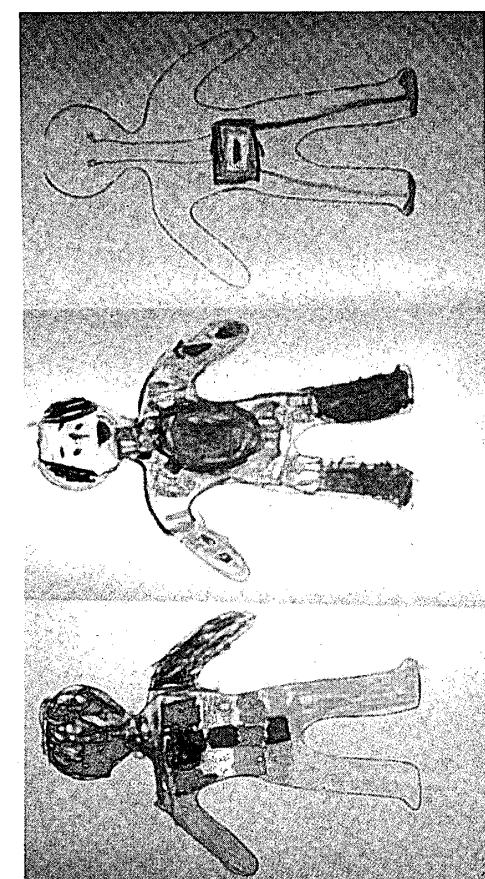
1. 本研究の対象となった4、5歳児では、外側の身体像はほぼ出来ているが、内側のイメージは30%前後の者がまだ十分に形成されていないことがわかった。すなわち、自分の身体の内側を自分のものとしてまだ所有できていない段階であるといえよう。5歳児の中で既に月齢が72ヶ月に達している者は、かなりしっかりした身体像を描いており、この年齢のあたりにひとつの発達段階があることが示唆された。男児に較べると女児は少し内側の身体像の発達が遅いようである。
2. 身体像は解剖学的な知識が増すにつれて詳しいものになってゆくようである。骨、心臓、脳、血管など、幼児に親しみのある器官を中心に身体像が形成されるが、年長になると消化器官を描く者が増加する。
3. 個人的な病気の経験、身内の病気や死など、身体に関連した経験は身体像の形成に影響を及しているようである。

附 記

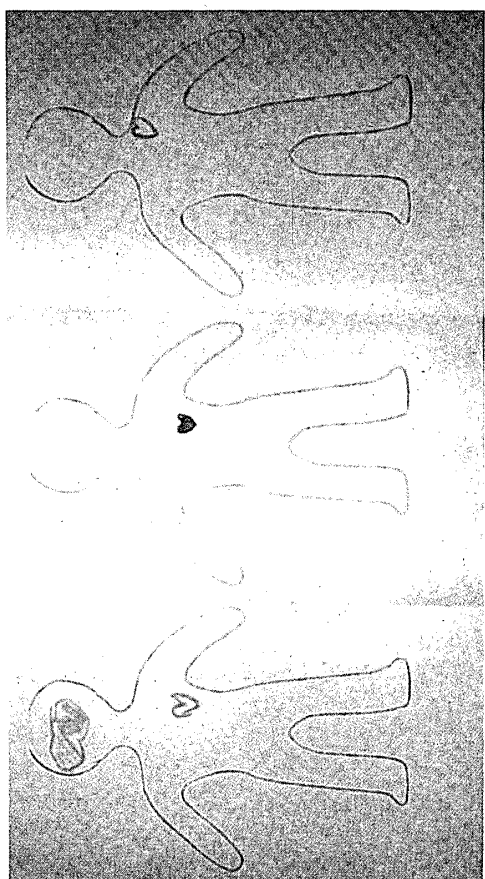
本論文のⅢ章は、1984年6月12日、岡山大学において開かれた、日本保育学会第37回大会において口答発表した「描画に表現された幼児の身体像 (ボディイメージ)」を骨子としたものである。

引 用 文 献

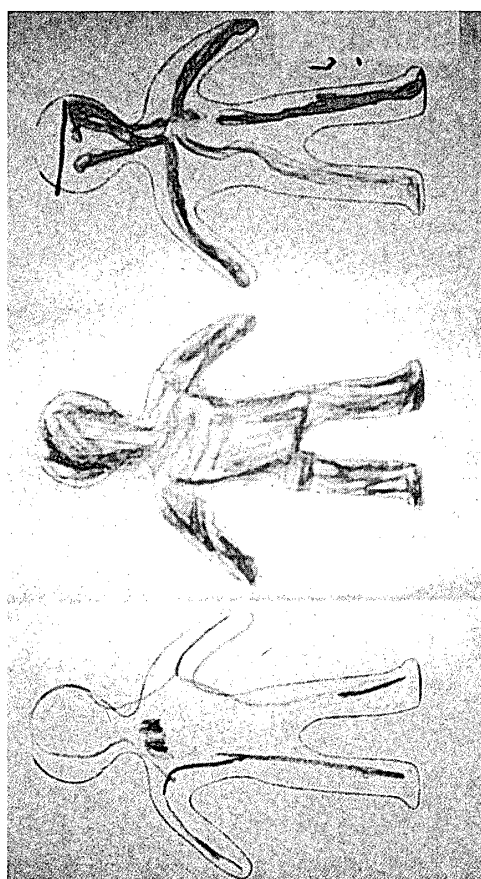
- 秋本辰雄 1977 ボディ・イメージの問題 教育と医学 25 476-484.
- Brumback, R.A. 1977 Characteristics of the inside-of-the-body test drawings performed by normal school children. *Perceptual and Motor Skills* 44 703-708.
- 針生 享 1984 ボディ・イメージの形成についての発達的研究—体内イメージを中心として 秋田大学教育学部研究紀要 34.
- 柏木恵子 1983 子どもの「自己」の発達 東京大学出版会
- 北村晴郎 1977 新版・自我の心理 誠信書房
- Kohlberg, L. 1966. A cognitive-developmental analysis of children's sex-role concepts and attitudes, in Maccoby, E. E. (ed.) *The Development of sex differences* Stanford Univ. Press. 82-173.
- 村田孝次 1981 児童心理学入門 培風館
- 西垣悦代 1983 人物画による幼児の性別知覚と恒常性の理解について 日本保育学会第36回大会 研究論文集 222 - 223
- 植村美民 1979 乳児期におけるエゴ (ego) の発達について 心理学評論22 28-44
- Williams, P.D. 1979 Children's concepts of illness and internal body parts. *Maternal-Child Nursing Journal* 115-123



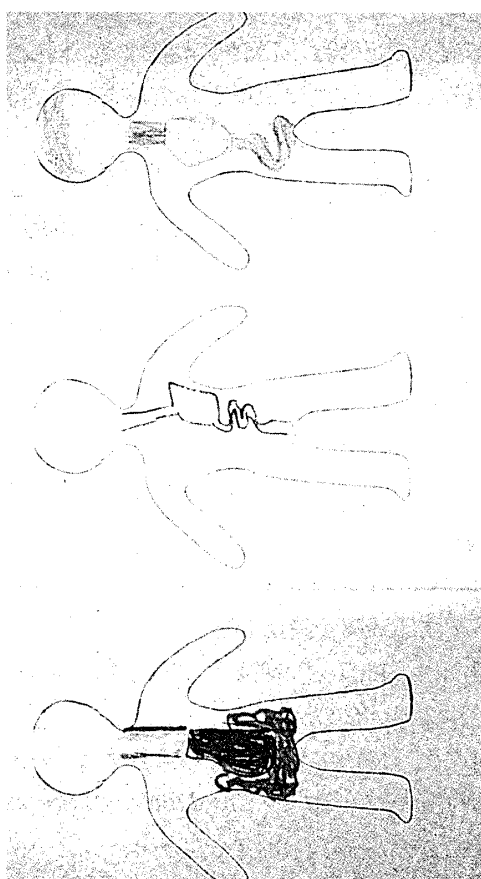
1) 4歳11ヶ月 女児 5歳2ヶ月 女児 6歳7ヶ月 男児



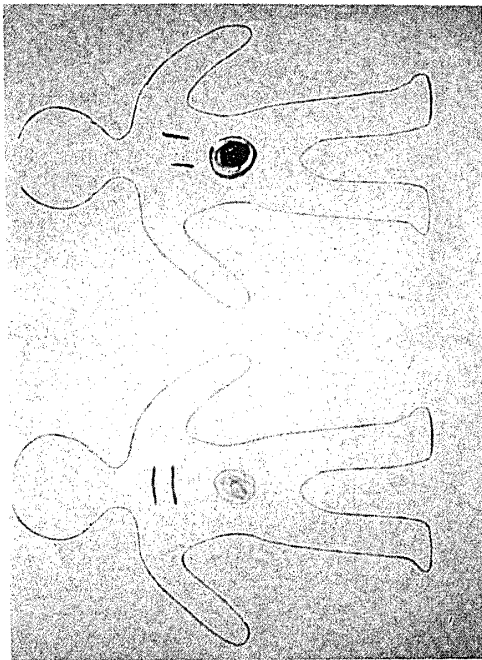
3) 5歳5ヶ月 女児 6歳5ヶ月 男児 6歳5ヶ月 女児



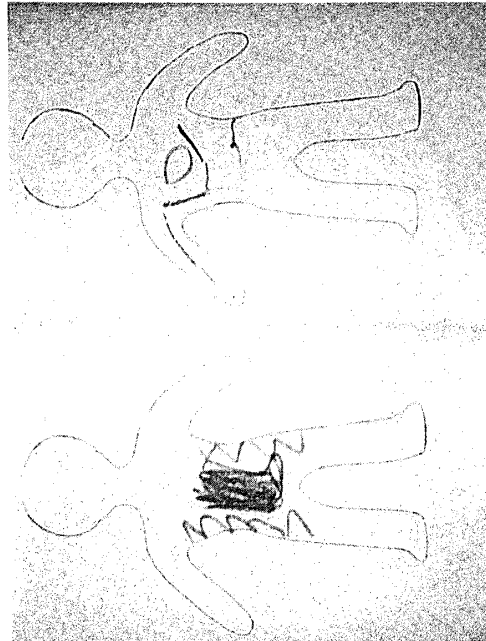
2) 4歳9ヶ月 男児 5歳1ヶ月 男児 6歳7ヶ月 男児



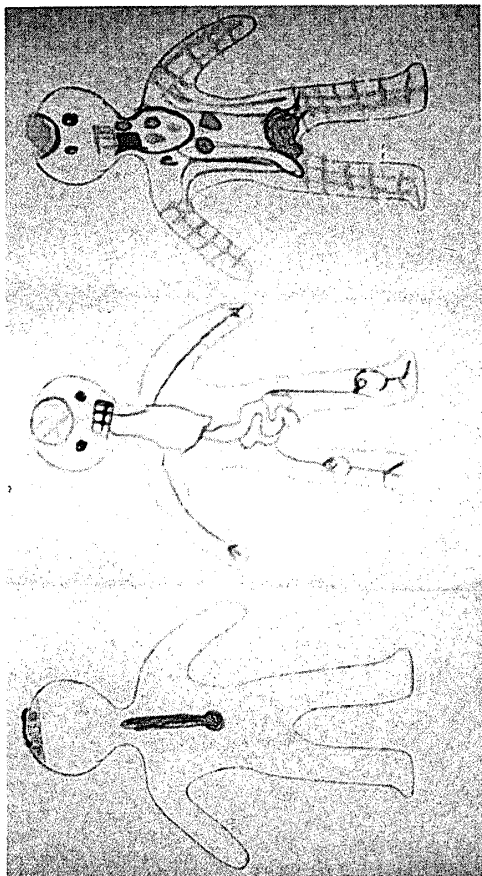
4) 6歳3ヶ月 男児 6歳5ヶ月 男児 6歳3ヶ月 男児



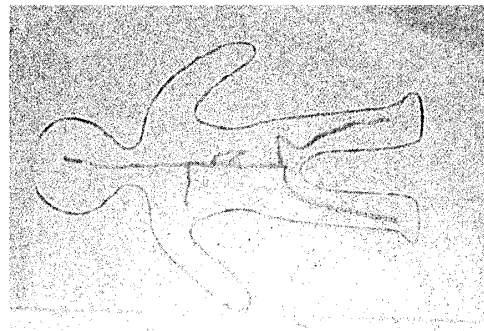
8) 5歳8ヶ月 男児 一卵性双生児



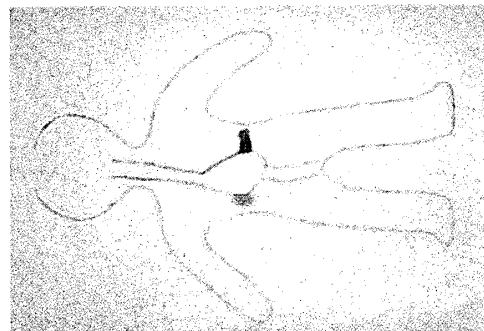
9) 4歳11ヶ月 女児 一卵性双生児



5) 6歳1ヶ月 男児 6歳8ヶ月 男児 6歳1ヶ月女児



7) 5歳7ヶ月 男児



6) 6歳7ヶ月 女児